



TITLE:

序「カラム」の時代VII--コラム「千一問」の世界

AUTHOR(S):

坪井, 祐司

CITATION:

坪井, 祐司. 序「カラム」の時代VII--コラム「千一問」の世界. CIAS discussion paper No.62: 「カラム」の時代VII--コラム「千一問」にみるマレー・ムスリムの宗教実践 2016, 62: 4-8

ISSUE DATE:

2016-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/228706>

RIGHT:

© Center for Integrated Area Studies (CIAS), Kyoto University

序『カラム』の時代Ⅶ

コラム「千一問」の世界

坪井 祐司

本論集は、1950年から1969年までシンガポールで発行された月刊誌『カラム (Qalam)』について、テーマごとに掲載記事を紹介する研究ノートをもとめたものである。以下では、まず『カラム』誌について簡単な紹介を行ったうえで、この論集のもととなった『カラム』プロジェクトおよび本論集の内容を紹介する。

なお、この本編は『カラム』を利用した共同研究における論集の七編目にあたるものである。このため、『カラム』誌およびプロジェクトの紹介については、過去六編の論集の序論と重なる部分があることをあらかじめおことわりしておきたい。

1. 『カラム』について¹⁾

『カラム』は、1950年7月にシンガポールにおいてエドルス (Edrus)²⁾により創刊され、エドルスの死去により1969年10月を最後に停刊するまで228号が発行された。この20年間という発行期間は、創刊後1、2年で停刊となることがめずらしくなかった当時のマレー語雑誌としては長いものであった。これは、同誌がマレー・ムスリムの間に受け入れられていたことを示している。

『カラム』の特徴は、第一にその記事が一貫してジャウィ (アラビア文字を改変したマレー・インドネシア語の表記法) によって書かれていたことである。マレー・インドネシア語の表記法は、この地域のイスラム³⁾化とともにアラビア文字を使用したジャウィが主流となった。しかし、19世紀後半以降ヨーロッパの植民地権力によりマレー語の公式のローマ字表記が定めら

れ、行政や教育の場で使用されるようになると、徐々にジャウィはローマ字にとってかわられた。旧オランダ領 (現インドネシア) 地域では20世紀初頭以降、旧イギリス領 (マラヤ、シンガポール) でも1960年代までに多くのマレー語刊行物がジャウィからローマ字表記に切り替わった。しかし、『カラム』は創刊以来1969年の停刊まで一貫してジャウィ表記を固守した。これは、『カラム』が非ムスリムを含めた幅広い読者を獲得することよりも、対象をムスリムに限定した主張を発信することを目指していたためであろう。

第二に、国境を越えた東南アジアのムスリムの紐帯を強調したことである。シンガポールで発行されていた『カラム』の主な読者はシンガポール、マラヤ在住者であったが、執筆者のなかにはシンガポール、マラヤだけではなくインドネシアのムスリム知識人も含まれていた。このため、インドネシアやその他東南アジアのムスリム社会の情勢を含む幅広い内容の記事が掲載された。さらに、エジプトなど中東で学ぶ留学生も寄稿しており、中東のイスラム思想を積極的に紹介した⁴⁾。

『カラム』の第三の特徴は、この地域の他の定期刊行物との交流である。『カラム』の記事のなかには、他の刊行物に掲載されていた記事が転載されたものもある。また、英語も含めて新聞・雑誌記事などを引用し、それに対して論評を加えたものもある。このため、『カラム』をみることで、単に同誌の主張というだけでなく、当時のこの地域のジャーナリズムの世界でなされていた議論のあり方や内容をうかがうことができる。

『カラム』は当時のマレー語ジャーナリズムの一翼を担っており、そのなかで民族主義に対抗するイスラム主義勢力の思想を代表する媒体と位置づけられる。『カラム』が刊行されていた1950年代、60年代はマラヤ (マレーシア)、シンガポール、インドネシアにおける脱植民地化の時期であった。このため、従来の研究

1) 『カラム』誌については、[山本 2002a] が詳細な紹介を行っている。

2) 本名はサイドアブドゥッラー・アブドゥルハミド・アルエドルス (Syed Abdullah bin Abdul Hamid al-Edrus)、『カラム』ではエドルス、アフマド・ルトフィ (Ahmad Lutfi) などのペンネームを使用していた。1911年に当時のオランダ領東インド・カリマンタンのバンジャルマシンでアラブ系の両親のもとで生まれた。その後シンガポールにわたって出版・文筆活動を開始し、1948年にカラム出版社 (Qalam Press) を立ち上げた。彼の伝記として [Talib 2002] がある。

3) 現在学術用語としてはイスラームと表記するのが一般的であるが、マレー・インドネシア語には長母音が存在しないため、本編では現地の発音に即してイスラムと表記する。

4) 編集者エドルスが1956年にシンガポールにおけるムスリム同胞団を結成すると、『カラム』編集部は事務局となり、『カラム』は同団体の事実上の機関誌となった [山本 2002a: 263]。

関心は民族主義勢力によるそれぞれの国民国家の建設に集中しており、同時期の政治や社会におけるイスラム主義勢力の動向には焦点が当てられてこなかった。しかし、『カラム』の記事からは、当時のムスリム知識人がこれらの国々が独立国家となってもさまざまな形で国境を越えたムスリムの連帯を模索し、対案を提示していたことが明らかになる。

『カラム』は当時のマレー・イスラム世界の知識人の思想や活動を明らかにするうえで貴重な資料であるにもかかわらず、これまで十分に利用されてこなかった。これは、『カラム』がジャウィで書かれているために利用者が限定されてしまっていたことにくわえて、複数の機関に分散して所蔵されていたため体系的に利用するのが困難であったことなどが理由として考えられる。

以上の認識のもとで、本論集のもととなる『カラム』プロジェクトは、同誌を収集して一つの資料として集めたうえで、記事の見出しおよび本文をローマ字に翻字してデータベース化し、一般公開して研究のための便宜を向上させることを目的としている。

2. 『カラム』プロジェクト

現在の『カラム』プロジェクトは、京都大学地域研究統合情報センター(以下京大地域研と略記)の共同研究「1950・60年代の東南アジア・ムスリムの社会史(研究代表者:坪井祐司)」および「ジャウィ文献と社会」研究会が中心となって行われている。『カラム』の所蔵機関である京大地域研の共同研究は、山本博之を中心として立ち上げられ、本年度で7年目となる。「ジャウィ文献と社会」研究会は、2009年に解散したジャウィ文書研究会の研究を継承し、発展させるための研究会の一つである⁵⁾。

プロジェクトの主たる活動は、『カラム』に関するデータベース構築、一般向けのジャウィ文献講読講習会、『カラム』を使用した研究である。ここでは、プロジェクトのこれまでの成果と今後の方向性についてまとめたみたい。

(1) 『カラム』雑誌記事データベース

プロジェクトの基礎となる資料である『カラム』は、山本博之により収集された。山本は、シンガポール国

5) 「ジャウィ文献と社会」研究会の詳細については、同会のホームページを参照(<http://www.cias.kyoto-u.ac.jp/~yama/jawi/index.html>)。

立大学図書館、マラヤ大学ザアバ記念図書室における資料収集により、『カラム』全228号のうち212号を収集した。そして、京大地域研が進めている雑誌記事データベース・プロジェクトの一部として、『カラム』紙面をデジタル化し、それぞれの記事の見出しのローマ字翻字を関連付けする作業を行った。これにより、ローマ字による記事見出しの検索により当該紙面を呼び出すことができるデータベースが作成され、一般に公開されている⁶⁾。

ただし、京大地域研の『カラム』雑誌記事データベースは、現在のところローマ字による記事見出しの検索はできるものの、記事本文の検索はできない。本文も検索の対象とするためには、記事をローマ字へと翻字してデータ化し、それをデータベースに連結する必要がある。このため、2009年から「ジャウィ文献と社会」研究会のメンバーによる『カラム』の記事本文の翻字作業が開始された。

『カラム』記事のローマ字翻字作業は、2011年度から京大地域研の地域情報学プロジェクト(雑誌データベース班)による事業として行われることになった。これは、マレーシアの出版社クラシカ・メディア(Klasika Media)社との提携により行われているもので、『カラム』のすべての記事を年代順に翻字し、検索が可能なPDFファイルをジャウィ版と同様のレイアウトにして作成するものである。この成果は、「ジャウィ文献と社会」研究会のホームページにて順次公開されている。翻字された記事本文をデータベースに組み込み、本文中の単語の検索から当該紙面を読み出せるようにするための「カラム雑誌記事データベース」の構築も進行中である⁷⁾。

さらに、『カラム』雑誌記事データベースは、他のマレー・インドネシア語文献やコーランなどアラビア語文献のデータベースとの接合が構想されている。さしあたり、期待されるのは以下の方向である。

第一に、『カラム』以外の資料を含めたマレー・インドネシア語文献の統合データベースの構築である。地域や時代を越えた記事の横断的な検索は、マレー・インドネシア語定期刊行物の研究には重要である。マレー・インドネシア語雑誌は短期間のうちに停刊となるものが多いが、同じ編集者や執筆者が別の雑誌を

6) 京大地域研の『カラム』のデータベースについては、同研究所のホームページを参照(http://app.cias.kyoto-u.ac.jp/infolib/meta_pub/G0000003QALAM)。

7) データベースは現在構築中であるが、その一部は公開されている(<http://majalahqalam.kyoto.jp/>)。

立ち上げることもめずらしくない。くわえて、その内容においても、雑誌の枠を越えた引用や論争が行われてきたため、複数の雑誌を一つの言論空間、資料群としてとらえる必要がある。このため、京大地域研の雑誌記事データベース・プロジェクトでは、刊行期間が長いマレー・インドネシア語定期刊行物を収集し、誌面のデジタル化および記事見出しによる検索可能なデータベース作成を進めている⁸⁾。

もうひとつは、オーストラリア国立大学が実施しているマレー語文献コンコダンスプロジェクト(以下MCプロジェクトと略記)との連携である⁹⁾。MCプロジェクトでは、主に20世紀以前の王統記を中心に本文テキストをローマ字化したものをもとにコンコダンスを作成し、データを順次公開している。また、シンガポール国立大学は1930年代のマレー語日刊紙のローマ字翻字を行っており、この結果をMCプロジェクトと接合することが計画されている。これに1950、60年代を主に扱う京大地域研の雑誌記事データベースを接合することで、より広い範囲のマレー・インドネシア語文献を包括した統合データベースを構築することができよう。

(2) ジャウィ文献講読講習会

『カラム・プロジェクト』の活動の二つ目は、マレー・インドネシア語既修者を対象にジャウィ文献講読講習会を開催することである。講習会は参加者を一般公募して行っており、日本において触れる機会の少ないジャウィを学ぶ機会を提供することと、ジャウィに関心を持つ研究者のネットワークを深化させることを目的としている。講習会は2009年以来年1回行っており、2011～13年は日本で唯一のマレーシア語専攻を有し、ジャウィをカリキュラムに組み込んでいる東京外国語大学のファリダ・モハメド講師の全面的な協力を受け、同大学にて開催した。講習会用にジャウィを学ぶための教科書の編纂も行っている[坪井・山本編2013b]。

(3) 『カラム』共同研究

プロジェクトの活動の第三は、『カラム』を利用した研究活動である。プロジェクトでは、メンバーがそれぞれの問題関心に基づき『カラム』の記事を利用した研

究を行っている。共同研究では年に3回程度の研究会を開催して議論を行っており、その成果としてまとめられたのが本論集である。ディスカッション・ペーパーは2010年以来年1回発行されており、これが7編目となる。その内容については次節で紹介することとした。

さらに、同プロジェクトが現在力を注いでいるのは国際的提携の分野である。プロジェクトでは『カラム』研究を国際共同研究へと発展させるため、マレーシアにおける共同事業や成果の発信に努めている。

2013年度から、京大地域研とクラシカ・メディア、マレーシア・ジャウィアカデミー(Akademi Jawi Malaysia)との提携により、『カラム』に関する電子出版事業が開始された。これは、翻字された『カラム』記事の復刻版およびそれに関する論文集『遺産から展望へ(Dari Warisan ke Wawasan)』を電子書籍として出版するものである。ジャウィの電子アーカイブ化事業は、マレーシアのマレーシア国立図書館、言語図書局(Dewan Bahasa dan Pustaka)とも提携して行われることとなった。それとともに、本プロジェクトはこれまでに年1回程度マレーシアにおいて『カラム』に関する研究成果を報告するワークショップや学会セッションを開催してきており、成果の発信および現地社会への還元も行っている。

プロジェクトでは、今後ともマレーシアの研究・出版に関わる諸機関と連携し、デジタル化した『カラム』の公開、共有を進めるとともに、研究面でも国際的な共同研究へと発展させていくことを計画している。

3. 本論集の構成

本論集は、『カラム』における名物コーナーである「千一問(Seribu satu masalah)」をとりあげた特集号となっている。「千一問」はQ&Aコーナーであり、読者による質問にチュムティ・アルファルーク(実際には『カラム』誌の主筆エドルス)が答える形式がとられている。論集は、「千一問」に関する論考4編と資料編(『カラム』第1～25号における「千一問」の試訳)からなっている。以下、内容を簡単に紹介したい。

坪井祐司「コラム「千一問」について」

坪井は、「千一問」に関する全体的な紹介を行っている。「千一問」では、マラヤの幅広い地域から質問者が投稿しており、その関心も多様であった。質問の多く

8) 京大地域研でデータベース化を進めている雑誌の詳細については、[山本編2010a: 6]を参照。

9) 詳細については、プロジェクトのホームページを参照(<http://mcp.anu.edu.au/Q/mcp.html>)。

は、人々の日常的な行為や慣習について、回答者に対してイスラムの立場からの判断を仰ぐものであった。その主題は結婚・離婚、男女関係、地元根付いた慣習からマラヤの政治・経済やマレー人コミュニティなどさまざまなあり、マラヤの社会においてムスリム個人がおかれた多様な環境を示している。

光成歩「千一問に見る都市、多民族社会、家族形成」

光成は、結婚と家族についての質問を取り上げている。マラヤで慣習的に行われてきた結婚や離婚の形態は多様であった。非ムスリムと結婚や養子関係を通じて結びつくこともあった。それに対して、回答者はイスラム改革思想の立場からしばしばその慣習を批判した。ただし、回答者はイスラムや法に照らした良し悪しで断じるばかりでなく、現実には即した提言をする場合もあった。そのやりとりからは、マラヤがもつ社会の流動性・多様性と、第二次世界大戦後の社会改革及び宗教改革思想の浸透という時代の変化とがうかがえる。

金子奈央「1950年代初頭における

マレー・ムスリムの社会認識・関心」

金子は、当時のムスリムの社会情勢に対する認識に着目した。植民地からの独立を目指すマラヤにおける指導者の役割やマレー人社会の遅れに対する懸念や発展への展望、インドネシアや他のイスラム世界への関心など、読者が自らとの繋がりのある問題として意識していた空間には広がりがあった。ムスリムたちは、自らとは異なる人々、文化および習慣、地域や国、思想について、自らとの差異を認識し、異なるものとの関係を築きながら宗教的な正しさを確保することを模索していた。

山本博之「車輪を担う」

山本は、質問に対する回答に注目して、コラムの主である主筆エドルス思想を読み解いている。創刊号における牛車の車輪に関する最初の質問からは、『カラム』がマレー語の論壇においては小規模ながら、小回りの利く媒体として先導するという決意が見いだせる。映画に関する一連の回答からは、同じメディアとしてエドルスが映画を意識しており、他媒体との競争のなかで『カラム』を引っ張っていかうとしたことがうかがえる。

亀田堯宙「千一問の質問における型」

亀田は、情報学の立場から「千一問」における質問文を分析している。頻出する単語とその組み合わせから質問の表現としての「型らしさ」を判別する試みである。その結果、“Apa(疑問詞の「何」)”と“hukum(イスラム法)”などの単語の組み合わせが質問の型として抽出できるとした。

資料編「千一問」試訳

『カラム』第1号(1950年7・8月)～第25号(1952年8月)までの「千一問」に掲載された質問と回答を日本語訳し、掲載順に並べたものである。

4.『カラム』の時代——編集者と読者の対話

本特集に収録した「千一問」は『カラム』の第25号までであり、全体からみればごく一部に過ぎない。このため、分析も限定的なものであることは留意する必要がある。今後はそれ以降の分についても分析を進め、その位置づけを再検討するとともに、年代的な変遷も考慮していく必要がある。しかし、ここでは暫定的なまとめとして、本特集の論考から明らかになる「千一問」の重要性について、簡単に記してみたい。

第一に、このコラムが『カラム』の読者の日常的な関心を明らかにしていることである。それらは、男女関係から政治経済にいたるまであらゆる要素が含まれる。光成論文、金子論文で論じられているように、質問の内容からは多民族・多宗教のマラヤ社会においてマレー・ムスリムたちがさまざまな関係性のもとで暮らしており、その社会のなかで彼らが宗教的な正しさを確かめようとしたことがわかる。そこから、これまでほとんど光が当てられてこなかった当時のマレー・ムスリムの宗教実践のあり方がうかがえる。

第二に、山本論文で分析されたように、回答者としての主筆エドルス思想が明らかになることである。『カラム』にはエドルスの書いた記事は多数あるが、テーマの多様性という点では「千一問」が一番であり、エドルス個人の思想を分析するには最良の材料であろう。読者の関心に寄り添って直接語りかける「千一問」においては、イスラム思想から社会改革へと向かう流れがよく把握できる。これは、脱植民地化の過程で社会秩序が変わる時代の東南アジアにおけるイスラム知識人のあり方を示唆するものでもあろう。

「千一問」は、誌上における主筆エドルスと読者の対

話である。新聞・雑誌の大衆化が進んだ『カラム』の時代、多くの媒体が読者投稿のコーナーを設け、公開の場で対話が行われた。とくに、「千一問」は読者の側から問いを投げかけるという点で読者の側の関心が明確に示されており、マレー・ムスリムの社会史を考えるうえで豊かな材料を提供している。そうしたムスリム社会のあり方がイスラム主義の改革思想にも影響を与えているのであり、「千一問」はさまざまな課題を提起する貴重な資料であるといえるだろう。

参考文献

- Talib Samat. 2002. *Ahmad Lutfi: Penulis, Penerbit dan Pendakwah*. Kuala Lumpur: Dewan Bahasa dan Pustaka.
- 坪井祐司、山本博之編 2011『『カラム』の時代Ⅱ——マレー・イスラム世界における公共領域の再編 (CIAS Discussion Paper No.19)』京都大学地域研究統合情報センター。
- 坪井祐司、山本博之編 2012『『カラム』の時代Ⅲ——マレー・イスラム世界におけるイスラム的社会制度の設計 (CIAS Discussion Paper No.23)』京都大学地域研究統合情報センター。
- 坪井祐司、山本博之編 2013a『『カラム』の時代Ⅳ——マレー・ムスリムによる言論空間の形成 (CIAS Discussion Paper No.32)』京都大学地域研究統合情報センター。
- 坪井祐司、山本博之編、ファリダ・モハメッド協力 2013b『ジャウイを学ぶ (CIAS Discussion Paper No.38)』京都大学地域研究統合情報センター。
- 坪井祐司、山本博之編 2014『『カラム』の時代Ⅴ——近代マレー・ムスリムの日常生活』(CIAS Discussion Paper No.40)』京都大学地域研究統合情報センター。
- 坪井祐司、山本博之編 2015『『カラム』の時代Ⅵ——近代マレー・ムスリムの日常生活 2』(CIAS Discussion Paper No.53)』京都大学地域研究統合情報センター。
- 山本博之 2002a「資料紹介『カラム』」「上智アジア学」、20: 259-343。
- 山本博之 2002b「ジャウイ綴りマレー語の書き方と読み方——20世紀マレーシア地域を中心に」『上智アジア学』、20: 359-382。
- 山本博之編 2010『『カラム』の時代——マレー・イスラム世界の「近代」』(CIAS Discussion Paper No.13)』京都大学地域研究統合情報センター。